

その年は、特に暑い夏だった。

朝も早くから蝉が鳴き、その鬱陶しさで目覚めると、部屋は既に湯気が出るほどに暑くなっていった。

Tシャツが汗で身体に貼りついてベタベタする。

気持ちが悪い。

すぐに窓を閉めてクーラーをつけると、國男は枕元に置いてあった眼鏡をかけてベッドからおりた。そして夜通し電源を入れていたパソコンのマウスを動かし、モニタを確認する。

伊藤國男には自覚のある悪い病があった。

数年前からはファイル交換ソフトを使い、その病を紛らわせている。インターネットを使う前はお金も手間もかかっていたが、今は簡単だった。

そして三十も後半になって結婚を考えていない理由もそこにあった。

「國男起きたの？ シャワー浴びるなら急ぎなさい。」飯食べる時間無くなるでしょう？」

部屋の外から母親に声をかけられ、國男は返事をした。

「わかった。今行く」

「先生おはようございます」

「おはよう」

「せんせーおはよー」

「お、髪切ったのか？」

廊下で ■■■ たちに声をかけられ、國男も笑顔で挨拶を返した。

ようやく採用試験に受かり、二年前からはれっきとした ■■■ 学校教諭。

大学時代から続けていた塾講師も気楽で良かったが、将来的な保証はない。決して若くは無い母親との二人暮らしをしていく上でも、しっかりとした基盤が欲しかった。

三十過ぎてからの採用試験は、勉強にブラ

ンクもあり簡単ではなかった。六度目の試験で受かった時は、母親も涙を流して喜んでた。

女手一つで育ててくれた母親を悲しませることだけは出来ない。

國男は皆に尊敬され好かれる『●●学校の先生』として、毎日を過ごしている。

真面目で無遅刻無欠勤、保護者からの評判も悪くは無いし、●●たちにも嫌われてはいないと思っている。

物騒な昨今、●●たちを守るように身体も鍛えている。週三回のトレーニング通いもかかしていない。

國男が受け持っている●●年二組に入ると、遊んでいた●●●●たちはお喋りをやめて各々の座席へついた。教壇に立つと、いつものように学級委員が号令をかける。

「起立、礼」

「おはようございます」

三時間目は抜き打ちで国語の小テストをすることに決めていた。

「大丈夫、普段真面目に授業を受けていたらわかる問題だけだからな」

数人からのブーイングにそう答えると、緒タは最前列の●●●●に問題用紙を配った。

クーラーなど無い教室は、窓を全開にしているも暑かった。

本当に暑い日だった。

蝉が五月蠅く気が散るほどだったが、窓を閉めてしまふ訳にもいかなかった。

蝉の鳴き声と、テストを受ける●●●●たちが動かす筆記用具の音に交じり、窓の外からはしゃぐ子供たちの明るい笑い声が聞こえてきた。

涼しそうな水音もする。

國男は窓のほうへ近付き、三階から外のプールを見下ろしてみた。

どこかのクラスが水泳の授業をしている。

見ているだけでも涼しそうで、國男はうらやましく思った。

ふと、眼鏡を拭いてかけなおし、もう一度目を凝らしてよく見てみる。

騒いでいる■の中に、去年受け持っていた■年一組の■が居た。今は■年一組になっている。

去年よりもだいぶ大きく成長した、皆の長い手脚がまぶしかった。

「先生」

突然、教室に高く澄んだ声が響く。

学級委員の少年が、手を上げて國男のほうをまっすぐに見ていた。

「ん……、ああ。何だ？」

「問四の一番最後の問題なんですけど、間違ってますか？」

そう言われ、慌てて手に持っていた問題用紙を見返してみると、一箇所漢字の送り仮名に間違いがあった。

「えっ、……ああ本当だ。送り仮名が間違っ

てるな。ありがとう山本」

少女のような顔をした学級委員の山本綺夕^{きせき}。

いまだきの親が付ける変わった名前と顔立ちのせいで、最初は女の子だと思っていた。

國男が礼を言うと、綺夕は無言で頷き再び問題用紙に向かった。

昼休みが終わる頃、そろそろと■年生の男

子■だけが体育館に入っていくのが見えた。

教室へ向かっていた國男はふと立ち止まり、その様子を眺める。

皆が口々に今日は何の映画なんだろうと話している、楽しそうに見えた。

そこへ通りかかった■年担任の男性教師を國男は呼びとめ、訊ねてみる。

「猪口先生、今日は映画鑑賞会ですか？」

國男の問いかけに猪口は少し照れたように答えた。

「今日はアレですよ。ほら、女の子だけが受ける……」

「ああ……」

國男自身にも経験のあることだった。

ある日突然、女子■と男子■が分けられ、女子■だけが特別なビデオを見せられる授業。

「女の子はみんな視聴覚室に移動です」

いまどきの■は成長が早いから、■年生だともう遅いように感じた。実際、國男の受け持つクラスには、とても■学生には見えなような女子■が何人か居る。外見だけではなく、発言や仕草の端々にも『女』を感じることが多かった。

それに比べると、やはり男子■は見た目も言動も、随分■に見える。

そんなことをぼんやり考えていると、始業のチャイムが鳴った。

國男は慌てて教室へと早足で向かった。

なんだか落ち着かなかった。

黒板にチョークで数字を書いている最中も、ずっとそわそわとしている。

その理由は國男自身がよく解っていた。

五月蝍い蟬の鳴き声とも相俟って、意識が朦朧とする。

目が霞み、教科書の文字がぼやけて見えた。

國男は眼鏡を外して目を擦る。

何とか区切りの良い箇所までを書き終えると、國男はチョークと教科書を置いて話をした。

「みんな、先生はちょっと用事があって……今から十分くらい出かけるけど、騒ぐんじゃないぞ」

途端に教室がざわついた。

「静かに！……算数ドリルの四十ページから四十三ページ、解いておくように」

適当に自習箇所を告げると、クラス委員の綺夕に目配せをする。

「山本、頼んだぞ」

國男の頼みに、綺夕はいつでもどおりの返事をした。

「はい。先生」

國男の足は、自然に■年一組の教室へ向かっていた。

■年の教室がある廊下は静かで、誰も居ないのが解った。開いた窓から聞こえる蟬の鳴き声以外は國男の靴音だけが響いている。

息を殺し、■年一組の様子を小窓から伺う。やはり誰も居ない。

國男は静かに■年一組の引き戸を開け、中に入ると再び音を立てないように戸を閉めた。教卓にあった座席表を頼りに、國男は一人の机を探し当てる。

その机の横には、可愛らしいキャラクターがプリントされた鞆が掛けてあった。

國男はその鞆を静かに取り、机の上に乗せ

ると中を開ける。

給食のふきんや箸の下、鞆の底のほうにひんやりとした袋があった。

その不透明なビニール袋の中を覗くと、國男の考えた通り、濡れたスクール水着が入っている。

國男には悪い病気があった。

——自分は病氣なのだ。

そう言い聞かせながら、國男は塩素のにおいがするスクール水着を取り出し、両手で広げる。

胸には大きく『佐伯』と名前が書かれた布が縫い付けられていた。

さえき えみ か
佐伯江実花。

去年、初めて赴任したこの学校で、初めて受け持ったクラスの女子■だった。

性徴など見られない、■そのものの可愛

らしさに國男は惹かれていた。

不自然にえこひいきをしないよう、それ
いて嫌われないように細心の注意を払いなが
ら一年間江実花と接していた。自分を抑えて
よく我慢したと國男自身も思っている。

下着を必要としない薄い胸、すらりと伸び
た白い手足、やわらかく長い髪、色素の薄い
大きな瞳を飾る長い睫毛……全てが國男の理
想だった。

直接、江実花に何かをしたいわけではない。
犯罪者にはなりたくないし、江実花を汚し
てしまうのは勿体無い。

薄汚れた『女』では無い『少女』としての
江実花を大切に思っていた。

どうしても自分を抑えきれない時は、スポ
ーツジムへ行って発散する。

それでも駄目で、ネットで収集したファイ
ルで誤魔化す夜もあった。

ただ、江実花を眺めているだけで良かった。
少女期の江実花を見守っているだけで良か

ったのだ。

担任が変わる時に寂しいと泣いてくれた江
実花が『女』になるまでは。

水滴が落ちないように、國男はビニール袋
の中で江実花のスクール水着を広げる。

自分は病気なのだと繰り返しいい聞かせて
正当化しながら、その水着を裏返した。

こうしている今も自宅にある國男のパソコ
ンはフル稼働していて、ハードディスクには
違法なファイルがどんどんたまっていく。

——ああ、蟬が本当に五月蟬い。

裏返した水着の、クロッチ部分を探し当て
ると、國男は濡れたそこへ鼻先を押し付けた。

ピツ、という聞きなれた音に、國男は振り
返った。蟬の鳴き声に交じり、確かにその音
がした。

閉めたはずの扉は開いていて、そこには無表情の綺夕が携帯電話を片手に立っていた。

あんなに五月蠅かった蟬の鳴き声が、國男の耳に全く聞こえなくなる。

國男は慌ててスクール水着を袋の中に押し込めると、綺夕を叱り付けた。

「やっ、山本……。じゅ、授業中だぞ？ 自習していると言っただろう？ それにここは」

「■年生の教室で、一体何してたんですか？ 先生」

いつもと同じあどけない微笑を浮かべ、綺夕は答えた。

「――綺夕に写真を撮られた……」

そのことに気付いた瞬間、國男は綺夕の持っている携帯電話に飛び掛るが、簡単にかわされてひんやりとした床に転ぶ。

「もう駄目ですよー。いま家のパソコンに送っちゃった」

綺夕が淡々と放った言葉に、目の前が真っ暗になるという状況を、國男は生まれて初めて実感する。

それは想像していたよりもずっと緩やかで、深い深い闇だった。

「まさか先生がこんなことするなんて……」
聞こえない。

「この写真を校長先生とか教育委員会じゃなく、マスコミに送ったり……そうだ。どこかにこれをアップロードして、全世界に見てもらうほうがいいのかなあ？」

何も聞こえない。

「そしたら先生はもう、先生辞めなくっちゃだめですね。社会的にもマッサツかなあ……」

綺夕の言葉が全く耳に入っていない。

床に這いつくばったまま、國男は綺夕の足に縋り付いた。

「おっ……お願いだ、山本……！ このこと

は、このことは誰にも言わないでくれ！ 頼む、お願いだ……」

震える声でそれだけをようやく搾り出す。

「……………」

しかし綺夕は答えなかった。

「……お願いだ、山本……何でも、何でもする！ だから」

「何でもですか？」

二度目の懇願に綺夕は言葉を返した。

訊ねられた國男は一瞬言葉に詰まる。

綺夕は國男の返事を待たず、返事をした。

「わかりました」

継り付く國男を足を使って退かしながら、笑顔を見せる。

「あそこ、片付けたほうがいいよ？」

江実花の机を指差して綺夕は飄々と言った。

慌てて閉まったビニール袋が、手提げ鞆からみっともなくはみ出ている。

「それじゃ先生、僕今日は早退するから。適当によろしくね！」

「……………」

國男はただ黙って綺夕を見送ることしか出来なかった。

早々に仕事を終えて國男はバスで帰路に着いた。

結局五時間目に國男は教室には戻らず、六時間目の授業は読書に変更をした。

綺夕の無邪気な声と笑顔が、國男の頭から離れない。

校長、教育委員会、マスコミ、アップロード……全て、考えたくも無い。

社会的に抹殺で済むだろうか？

母親はどんなに悲しみ、自分を罵るだろう。いや、罵るところか心中を迫られるかもしれない。

しかし、万が一。綺夕の撮影した写真が不鮮明だったり、本当は何も写していないということは考えられないだろうか？

見られてはいたが、國男には日ごろからの信用があるはずだ。綺夕の言葉は■■■■のいうことだと片付けられることも無いだろうか？

そんな微かな可能性を考えていた時。

國男の携帯電話が振動した。

バスの一番後ろの座席で、國男はポケットから携帯電話を取り出してみる。

メールだったが、送信元の心当たりは無い。

絵文字も顔文字も一切無い、淡々とした文章にファイルが添付されていた。

『明日は土曜ですね。先生はおひまですか？たぶん用事ないですよ。ひまだったら一緒にあそびましょう。』

國男の最後の望みは絶たれた。

恐る恐る添付されていた画像ファイルを開く。

「ひっ」

思わず変な声をあげた國男のほうを、周りの乗客が見る。

慌てて隠した携帯電話の画面を、國男はも

う一度見た。

そこにははっきりと、みつともない自分の姿が写っていた。

■■■■のスクール水着に鼻先を埋め、恍惚としている醜い國男自身が。

運の悪いことに、スクール水着の名札までがはっきりと見えている。

「……………」

綺夕からのメールに間違いは無さそうだった。

震える手で文章を打ち、國男は返事を返す。

『何をすればいい？』

返信はすぐに来た。

『先生の家遊びに行きます』

「こんにちは！」

チャイムを聞いた母親が國男よりも早く玄関ドアを開けると、そこに居た綺タを見下ろして少し驚いたように言った。

「あらあら……まあ、ずいぶん可愛いお客さんだこと」

母親は汗まみれの綺タをクーラーの効いた応接間に案内し、暗い顔をして無言で立っている國男に耳打ちをする。

「國男、生徒さんと学校の外で個人的に……問題にならないの？」

普通以上に教え子と仲良くするのはいけないことだと、教師ではない母親までが知っている。

「いや、そういうのじゃないから……それより母さん、もういいから。部屋で休んで」

綺タは二人の会話が聞こえたのか、しゅんとして言った。

「……すみません、僕が無理言って来ちゃったんです。迷惑かけてごめんなさい」

「そんな、そういうのじゃないのよ？」

消え入りそうな綺タに母親は慌ててフオロ―をする。

「本当にいいから、さ」

下手に会話をさせて、例のことを母親にばらされたくはない。國男は半ば強引に、母親を部屋から出るように促した。

「そう？　じゃあ、ごゆっくり」

「はい、ありがとうございます」

母親はそれ以上追求せず、綺タに笑顔を見けると自分の部屋へと戻っていった。

綺タもいつも通りの優等生の顔をする。

「………」

応接間で二人きり。

何でもすると約束してしまったことを後悔しながら、國男はわざとらしく綺タに担任の顔で話しかけた。

「や、山本……よく来たな。何しようか？」

いつもと変わらない笑顔で、綺タは無邪気に答える。

「先生の部屋が見たいなあ」

そこまでは國男の想定内だった。見られ
まじいものは、全て隠したつもりだ。

「……こっちだ」

國男は綺夕を自室へと案内した。

「へえ。けっこう綺麗にしてるんだ」

整頓された國男の部屋を見回し、綺夕は少
し意外そうに言う。

「……………」

部屋に入ることだけが綺夕の望みであるは
ずは無いだろう。國男は綺夕が次に発する言
葉を、目を閉じて震えながら待った。

すると綺夕は急に威圧的な態度になり、手
を差し出して言う。

「紙と、何か書くものの貸して」

言われるままに、國男は綺夕にレポート用
紙とサインペンを渡した。

綺夕はそれを受け取ると、少し考えながら
何かを書き付けていく。

綺夕が何を書いているのか國男には見当も
付かなかったが、それは絵ではなく文字のよ
うだった。

全てを書き終えたと、綺夕は用紙を割り、
國男へそれを差し出した。

「これ全部買って来て、先生」

「……………」

丁寧な文字で書かれてた言葉を見て、國男
は硬直した。

とても ■ には相応しくない、絶対に近づ
けたくはないアダルトグッズの名称が、その
紙にはいくつも羅列されていた。

ピンクローター二個、バイブレーター、ア
ナル用バイブ、コンドーム、潤滑ローション、
オナホール、

綺夕の無邪気な笑顔と書かれている言葉を
見比べ、國男は戦慄する。

綺夕が何を考えているのか、そして何をし
ようとしているのか……全く解らない。

何も言わずに黙り込む國男に、綺夕は少し

強めの口調で言う。

「角田町の裏通りに怪しいビデオショップあるでしょ？ ああいうところで売ってるんですよ？ こういうのって」

そのビデオショップには國男も一度だけ入ったことがある。大型チェーン店のように明るい店内とは不釣り合いな、アダルト雑誌やDVD、綺夕の言うアダルトグッズなどが大量に並べられていた。

「早く買って来てよ。早くしないとピアノのレッスンに遅れちゃう」

黙ったままの國男と部屋の時計を見比べ、綺夕は苛ついた様子で言った。

國男がようやく口を開く。

「……これを買って、山本はどうするんだ」

「どうだっていいじゃない。早くしないと先生のママに言いつけるよ？」

そう言いながら綺夕は携帯電話を取り出す。

國男は思わず膝を付き、フローリングの床に頭を擦り付ける勢いで土下座をした。

「それは……勘弁してくれ……、お願いだ」

大の男が二十以上年下の■■■■に、教師が教え子に本気で頭を下げた。

母親に知られるくらいなら土下座などいくらでも出来る。國男の教師としての誇りやプライドなど、綺夕の前では塵屑同然だった。

綺夕は満足げに微笑み、土下座したままの國男に聞こえるように、しゃがんで耳元で囁いた。

「うん。許してあげるよ、先生」

國男はゆっくりと顔をあげ、震える声で綺夕に言う。

「でも……山本を連れて行くわけには」

ビデオショップに■■■■を連れては行けない。

かと言って、自分の部屋に綺夕を置いて行くのも嫌だった。隠してあるとはいえ、クロージェットを漁れば色々出てくるし、電源を切っているパソコンもデータはそのままになっている。

「先生が帰ってくるまで、先生のママと一緒に

に居るよ。それなら安心でしょ？」

國男の言葉を予想していたのか、綺夕は微笑んで答えた。

「……………」

母親と綺夕を二人きりにしても大丈夫だろう。全てが國男を追い出すための口実で、出かけた後母親に何もかもばらされたら。

「約束は守りなさいってママに言われてる」

しかし今は、微笑む綺夕を信じる以外の選択肢は無かった。

國男は綺夕を連れて自室を出、母親の部屋のドアをノックした。

「母さん、ちよつとケーキ買ってくる」

國男の言葉に母親はドアを開けると、顔を出して言う。

「一緒に出かけるの？」

「いや……外暑いし、俺が一人で行く」

「それなら私が」

そう言っただけで身支度しようとする母親に、綺夕は優等生の顔で言った。

「先生のママ、僕と一緒に先生を待っていてくれますか？」